



上田殊成論雅  
本居宣長辨

全

ホ 2  
5272



村田希足大人

假烟舎六輔

彦根藩字 宣長門  
天保六年秋 年七十五



河  
川  
段

全

門 本 2  
號 5272  
卷



渡邊蔵書



上田秋成論難同辨



秋

秋成の初度此難文ハ寫しつゝ其旨ハ明クシテ其旨ヲ明クシ  
りて其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ  
又其人其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ

宣田安中納言殿の沙同藤原美樹の著るる所を其旨ハ明クシ  
偽作といふ所ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ  
其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ

秋 假字同音ハ往年美樹子ノ遇ハ附借無クハ其旨ハ明クシ  
其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ  
其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ其旨ハ明クシ

他人の俗語よあはれと英附がけけりとも伝名と記さるる  
 秋原又師名に傳りしを是に同きを以て決まれば所あるの限  
 運りり直くあはれんをけりしをいへり

宣いのはらに俗作れといふはらに俗説はあらずに  
 物によりて俗化はあらずに俗と向て然るは美樹の  
 手よりて俗に借して寫さるるは俗に俗化はあらずに  
 いふはらに

右条一條

秋古右に人言語よ人の音の... 神風と加年加是と語...

宣私の... 宣私の...

形... の音形... 古... 今... 唯... 古... 今... 又... 是...

久らむとわれと今と魂とて皆ゆえ久らむとわれと  
もむなるやこれぞ書とむしれ今とても書とむと又ゆ  
ん久らんとむしむしとむした別とるあきたたひと  
わいのちの歌とゆへ言と誰とあつたやこれ  
此例とぬて持て今と辰古くうのづかしてるよ中古のゆん  
くらんと又たよ記とてなれゆへに記とゆむくらむと  
ゆひとてとてさぶぐーねとたひ書とむして加年  
加是とむしとて書とてるれてわん風か風とあつてや  
いひとてむしとて唱とるーと思ふに後  
世の記と別とるがぬんてとるまを中と久らく別  
からとれ程と思ふと別とるよとるも徳あつた思ふ

物をとてやこれに後世人のわんをたどむしと上古世人の  
つとらむは返とてもむぐーと思ふと今とて人も  
名はとるがむとむしとて唱とるよとるもむぐとる  
どらんらとて思ふとむしとて返とてむぐとるーと思ふと  
別とるよ別とるよのちとてとるべー又書とむしとてゆも  
せむとてせむとてとる書とてこれとて今思ふに年とて  
まがたまよとてとるやとてとるよとて今とて人よ  
よむとてとるよとてとるよとてとるよとてとるよとて  
よむとてとるよとて何とてとるよとて又書とてとるよとて  
いむとてとるよとて何とてとるよとてとるよとてとるよとて  
かかると古言とてとるよとてとるよとてとるよとてとるよとて

沈撥ありやまう句たり——沈撥しぬるを己がうりてい  
しうらむ私をいふたれ有るは

秋 音句よきとす西はあつらうんよやう一定の字をれ々  
んい音ありた句なりは之れにほ水の單のわきまハんの  
音もまよあつらうんいしほふよと上より連声なほして  
自然に人の音ありて其れをたづねる字と係りて年ル毛等  
の音は方弗たりて用ひて其れをたづね活用して歌をせむをい  
はしてまゝに思はるる

宣 西のあつらうんい音ありた句なりとく勿論に之れを係  
國の音は終有るはあつらうん直るるなりとくわたりて  
別のこととて連声なほして自然に人の音ありて中古の音使はるる

まゝに訛言としてなれは言はれぬ神自然なる音に  
古今の異をたづねれば今の人よんの音ありて古の人よんを  
音もまゝつらえたりとらむ石なり音なりとらむ言は上用する  
たりたり自然にけり音といふはつらうん音といふはかのま  
濁の音にれらも今の人よんの音ありて古の人よんをたづね  
知く——然るにまをたづねる音なりとらむとらむ中古の音  
なれとて用ひたりとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむ  
とらむとらむ——自然にありて用ひたりとらむとらむとらむとらむ  
らあつらうん——自然にありて用ひたりとらむとらむとらむとらむ  
沈撥ありて音ありて用ひたりとらむとらむとらむとらむとらむとらむ  
らあつらうんとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむとらむ



たぐはくすじすじかぐとよこしことよこしえりあつて歌也と云  
じとあつて<sup>行</sup>回廊の通音とて第三と第四と移用とて他もあつて又  
あつてとていふたれんあつて回廊の音よりいふ他は例として  
又用いられ用文字のころ活動とていふべしとて今ノ世  
列くる所はわがみくま入り中まは思ひながらもの且つ  
ハハ委く辨ず

右三條

<sup>秋</sup>三節とすしらすとて字音のひびたがうは國の言はれ連声とて  
即じとんと互に相通とて唱へ<sup>後</sup>且字はじと傳ふる曲  
へ物もあつてあつてあつてあつて唐玄宗と楊妃の李三郎  
とあつてとて儒士はあつてあつてあつてあつて

いふは又俗に海名は源三郎といふもいふは唱てきん  
とすしらすとあつてあつて<sup>後</sup>。經曲家の三老女はいふとあつて唱  
と皆自れり連声の昔は金明軍といふにやうに唱て今  
といふやうに連声やあつてあつてあつてあつてあつて  
とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

<sup>宣</sup>三とて返ては方より澄ぼくあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
愧く赤面とてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
とあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
んとあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて  
あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて





まゝに佛と唱へ又カキ念佛とて早く唱へたはなまゝに  
唱へたるも自然なると今此類者の定法や月はあら  
まゝに唱へたるも自然の連声として正しくなり  
や神風とつんげと唱へたに南無行法とつんまゝと唱へ  
たは人傳へて後つんまゝに今とて正しく唱へたは  
しめしめてそれとも同かきかたをんまゝに流ん  
誰と知ると神風の後せよか風と正しく唱へたは  
ん風と正しく唱へたは正しく唱へたは正しく  
いれんぞろとつんまゝと傳籍漢かかんまゝとつ  
かの神風は類のんと正しく唱へたは正しく  
正しく唱へたは正しく唱へたは正しく連声とつ

いそんか然もつんまゝに唱へたは正しく  
つんまゝに傳籍漢かかんまゝとつ  
だつんまゝに唱へたは正しく唱へたは正しく  
字もつんまゝに唱へたは正しく唱へたは正しく  
めまゝに唱へたは正しく唱へたは正しく  
まゝに唱へたは正しく唱へたは正しく  
類もつんまゝに唱へたは正しく唱へたは正しく  
つんまゝに唱へたは正しく唱へたは正しく  
つんまゝに唱へたは正しく唱へたは正しく  
者い音便とつんまゝに唱へたは正しく唱へたは正しく  
をんまゝに唱へたは正しく唱へたは正しく

自然と頼むては物くても然いふては是は正しと  
せん但一悉皇家上音便の言便よふとこそ音便はまう  
まうと取てよぶとらを難者と思はれりと思はれり外は  
ははらるるもわらわらと皇國は古言ははらるる  
不音便なりとて神んが唱ふるも音便なる方と  
しるるもは遠慮のんとは平じやと平じや  
三つはまや

右系四條

秋 奥之自然の音より金石絲竹草木羽毛は音ハ人の音ハ  
不正音とて一儻工の人の音声もははらるる  
くくともや系竹石正る音なるハ人は言はるる合奏するは草木

いぞ神と和えきん上古は言はるる系竹の音句よ合せて  
調へ歌をせよわらわらと彼踏とらるる覆槽の音は  
系竹の音とて響くは大神神といふは神の音とて  
うらぶ一人と物と音句和借せは調へるる物なれば  
よいぞはらるるの音は又風は級戸神の音は又  
やうははらるるは句の音とて不正とて又物と  
觸るるは其物の音と和して響きは水音の音表は  
しはらるるは音ははらるるは調へるるは  
系竹草木の音神といふは和えきん一氏民の己の  
る思はるる不正とて人信がら海外をあらるる人  
の言はるるも又私りては者くは右系

左社と奥が海せしめくも園音を長らひははらひ  
と人をけりて正しき心とていふははらひも元ぬひとを  
ましましゆく音は長まらば正しき心とて奥一人の心を  
いづるははらひも自物もを声するははらひを海をけりて  
化甲しははらひも自らははらひ魂う人心とてわく  
粟ぐりてははらひも

宣

こい余が心とていふ心得難しきほどたは相違のと  
余いざるははらひの声と正しき心とていふははらひ  
とて正しき心とていふははらひの音とていふははらひ  
不正しき心とていふははらひの音とていふははらひ  
不正しき心とていふははらひの音とていふははらひ

とて琴と弾する人々も声人の声とていふははらひ  
とていふははらひも正しき心とていふははらひの  
声とていふははらひも正しき心とていふははらひ  
の声とていふははらひも正しき心とていふははらひ  
正しき心とていふははらひも正しき心とていふははらひ  
物は和らむとていふははらひも正しき心とていふははらひ  
とていふははらひも正しき心とていふははらひ  
かたは和らむとていふははらひも正しき心とていふははらひ  
ははらひも正しき心とていふははらひも正しき心とていふははらひ  
不正しき心とていふははらひも正しき心とていふははらひ  
の音は正しき心とていふははらひも正しき心とていふははらひ

之て音正不正と律不和不利といふ事ありて相ひがらぬ  
ことあり又音と律と不正といふ事ありて余も之を  
きかざりて皆長と律と正とを物なり余も之を長と  
不正といふこと余がいふは外國人の音のゆゑに短くは短くは  
短くは短くは必まはつた音となくともやうなうけりやうな短  
必長くは音よりして正となくは短くは阿は音と短くは短  
く短くは必まはつた音なりゆゑやうな短くは必まはつた音  
なりして阿と正と短くは短くは短くは短くは不正といふ人の  
いふ事ありて意欲なくとたゞてみても終つていふ  
万国の人の音皆長といふ事余が意ありて外も皆  
短くは<sup>カラクニ</sup>漢國の音も短くは余が皇國の音は皆長といふ皆

ありて外國に異なりて正音といふ事ありて終者々の  
善國に在れば何れも万国に異なりて不正といふこと  
ありて一偏にして事なれば万国に向はれたる正  
音といふ事ありて不正なるものあり又異なりて正といふこと  
不正なるものありて一偏にして定むべきは人々頭より是れ方  
正大に似たり且洋音の音長を山口の長をふりてはむ  
ゆゑやうな音は長くは長くは長くは長くは長くは正  
音といふ事ありて長くは長くは不正といふ事ありて他は  
不正なるものありてやうな事ありて正といふ事ありて即自皇國の  
音は正なるものありて他は不正といふ事ありて破らぬ  
ことありて他は不正といふ事ありて正といふ事ありて













アガバニ復レビクニ才也ガ私ガ身ハ半濁ケ朦朧ノ言ハ  
聞キテクハ漢ノ私ハ身ハ借得志中間ニテ和借ノ声ク  
トモツカニ所令書ナニ依ク眼ニテ千輩ハワレハ身ヲモト  
借ナトクハクハナリトモテ依テ後トテ文字ハナノクニモ  
正ニハ漢國ノ言ハナクハ否トモハ然ラズ文字ハハハ  
自然ノ言ト不正トモハナクハ行ハ然モ家ナラトモ  
トハ中間ノ人ノ向ハノ不正トハナクハ由ニ由ニ思ハ  
言靈ノクハ本々ノ口古ハ及テ定ヒト口古ハ及テ定ヒ  
ト私意臆後カシキ返テ漢土魂ハ學者ノクハナノクハ  
音声ノクハ委トハナクハ然モ家ニ及テハ然リトモ  
漢土又漢國ノ音向ハノ不正トハ自然ノクハ及テ定ヒ

アハクガ自然ノクハ及テ定ヒト漢土魂ハ學者ノクハ  
音声ノクハ委トハナクハ然モ家ニ及テハ然リトモ  
漢土又漢國ノ音向ハノ不正トハ自然ノクハ及テ定ヒ  
アハクガ自然ノクハ及テ定ヒト漢土魂ハ學者ノクハ  
音声ノクハ委トハナクハ然モ家ニ及テハ然リトモ  
漢土又漢國ノ音向ハノ不正トハ自然ノクハ及テ定ヒ  
アハクガ自然ノクハ及テ定ヒト漢土魂ハ學者ノクハ  
音声ノクハ委トハナクハ然モ家ニ及テハ然リトモ  
漢土又漢國ノ音向ハノ不正トハ自然ノクハ及テ定ヒ  
アハクガ自然ノクハ及テ定ヒト漢土魂ハ學者ノクハ  
音声ノクハ委トハナクハ然モ家ニ及テハ然リトモ  
漢土又漢國ノ音向ハノ不正トハ自然ノクハ及テ定ヒ















戴はあへて... 畧言なり... 将重と云て... 此  
ひく... 言語を連發するは... 重く... 軽く... 活用... 一言  
の將重... 儻<sup>カラ</sup>字... 似て... 國<sup>コトダ</sup>の言靈... なる...

宣 言語は連發... 重くも... 軽くも... 活用... したく...  
山川谷川... 山谷を軽く... 川を重く... 川舟... 舟柳...  
舟... 舟柳が重く... 川を軽く... 舟... 舟柳...  
舟... 舟柳が重く... 川を軽く... 舟... 舟柳...

秋 淡と... 右第十條

宣 少... 類上古... 淡と... 口語... 似て... 今... 似て...

と... 唱... 然... 似... 淡... 似て... 今... 似て...  
音便... 飛... 見... 今... 似て... 似て... 似て... 似て...  
似て... 似て... 似て... 似て... 似て... 似て... 似て... 似て...  
似て... 似て... 似て... 似て... 似て... 似て... 似て... 似て...

右第十一條

秋 予... 似... の... 上... 似... 言... 似... の...  
魚... 似... 魚... 似... 似... 似... 似... 似... 似...  
宣 此... の... 似... 似... 似... 似... 似... 似... 似... 似...

ハテ何の事かと思へば、ハテ何の事かと思へば、

秋 みるもこのふり音と聞くは向生するたふり音の

即魚のよびきと考へて

宣 くら己が考へて、ハテ何の事かと思へば、上田氏らの、の所居、  
田の廻り、  
川、  
長く、  
と、  
と、  
と、

みる、  
引韻、  
魚、  
と、

かく、  
く、  
く、  
く、  
く、  
く、

おがみかき、  
おがみかき、  
おがみかき、

右、  
右、  
右、  
右、  
右、  
右、

秋 みる、  
みる、  
みる、  
みる、  
みる、  
みる、

石部十二條

秋 我社及礪波今治項自浪花子客より一社談<sup>コニ</sup>乃今道々  
出度り湯中六人の句と辨せむとてあつたなり俗言を以  
ていふは使ふて誤るるをくくつた究るべきに似たり之れ  
等ハ吐聲入り連聲つぎハ吸声の連聲とハ別れりあるを  
や熟く古言以考へたり吐声吸聲を雅俗以ちて吸声  
ハ古言雅俗をわたりハ解るる用ひて郡名郷名を以て雅俗敷  
雅俗をわたりて自れをわたりて萬葉集以ては古言俗語と  
傳へしものわたりては和名抄より以下今日にわたりて且も  
あつたなり知れぬは俗五天竺中より南天竺とハ國々相  
似たりわたりて下段へきくもつとて混るる湯とくまはらり

と又ゆへはゆへんと傳へゆへと傳へゆへと約するを類  
三郎とゆへと傳へゆへと傳へゆへと約するを類  
明々々規矩と正しくあつて計らん事終るるを  
圖 余がこころんを傳へ俗言をわたりては古言俗言に後せの  
訛言傳例をわたりてのころは吐声吸聲のころは及ばぬ  
本々もつて吐声吸聲をわたりて雅俗をわたりては五十  
音中の中へくもつて十音ハ吸声あつてもわたりて吸聲果  
して俗をわたりて古言の辨るるは十音と辨るるは但礪波氏  
の今もつてわたりて急便の音便のころはくもつてわたりて  
くもつてわたりてわたりてわたりて吐声吸聲を雅俗をわたりて  
わたりてわたりてのころはわたりては礪波氏が傳へた意ハ人の





自然なる理を何に準じて定むべきや、  
は既に外するべきは、  
死物を活用する時、大に遠くをいふたう、  
取らざるや、音に記する物、  
用を傳字する物、  
其死物の傳字は活用  
すべからざるは、  
抑傳字と死物をいふて、  
と物と然れども、  
とありざるは、  
日本記の傳字に二音は二音

通用たるを、  
通用たるもの、  
連綴るは、  
か、  
那岐とて、  
思ひ、  
讀み、  
とて、  
いた、  
三十九





あの子に音の読むは行年ごとや上直るす所は人の名  
なりはつとまをく人の身はなれ後所わはむともかく  
て見事きあく衣れり上程特鼻禪とて作らるごとく  
そはつやへは延延外國人の音の人の句れまはらわの後所  
と後一ものがくは弱くをわくがふりかて今勝波氏のん  
の句れ読むは後所を人の身は必具とては理を人毎ふ  
ことあり物にわたり行て見事きたる人たは弱くをわくこと  
ふたれふいふんがわ

右第十四條

秋入とて直みりてよの延に理よめはて最終はてしとて於  
表の直居り改てしとてなわよつて一行二地のほは讀む

あふいたは依りつて一今領て思ひわては但一字音な  
づひれとて皇朝を物音と用はてはしそはなれとてはつらに  
つとよりつた

圖 してつてびらるはせて物音くん得らに後一は物音に  
まやとちまのまもくをの類れ音よまはれし音ハ  
皇國の古き一いつてはみりつてよのつてまよと  
か致らひはつぶの音と長く延ぶの二音は約ありとの  
凡て言は延ぶは約ありとふらはいもまも也行せらるは  
くせて物音をん余やけり物音なりとては物音に音  
の元とつてはつてあはつては且音はつては物音に音  
まはらつては二の音をては音に直音なつて五十の中は

左て古言を用ひて今俗とわびてを以て古言の音  
和岐尉とくつがたに賀伊と約きて岐とるは是也  
いそ岐のなは物音をた岐とて物音とれいさ  
又和岐尉の岐とるにつきていそ岐とるは賀伊と  
物音をた岐とて物音とるは賀伊と物音といふべ  
くは賀伊の音は賀とて伊は約る伊とてたを列がたを  
是と准ひくつがたのつぎまゝに人傳へ

右十五條

秋 又之今やとくつがたに大君にわがたのわが約きてわが  
大君とるは是也い上のふつがたのほは伊とるは是也  
是は雙の古言を以ては是則備へるがたに例へ上

のふつがた音韻出沒の法も今も是とてわがたに  
連發合呼入はるは是即神氣といふ也と書て  
いふ也く連聲とるは書はる相發とてははるは不音候り  
連發とるはつとわがたを吾期大君と書て此  
然大王と書てつと今れはつと合呼入るは示と書  
候と書て上吉とて連聲入り候はつと明記するは是也文  
字ははるははるは所因りつとつと手らつと  
熟く思ふはつと今道は音句の字術とては  
の古言を以てはるはるは年月日思ひつとつと人  
いふはつと得た術を以てつと否と辨じつとつと  
彼人の言はるはつとつと書はるはつとつとつと 花押

宣 口を口に余にとておれまきみこしと使も昔の法にきき音は延べ  
後音の法にえりて行ど出の法と合の法の差よ  
いかんかよと法を海にみ用の辨をいふる由りやまじ  
すべしにばよとて用とて礪波氏やとすれに無事家類  
学家の法にりて海にみやし竹にたに泥を拘りて  
いたく古の法に誤るゝもわかれじとて 他は祇大王  
とすらよと今れやとすら合の法に示す書傳の  
くやば法めやく祇大王より必連声合の法をいづと  
よと皆とておれまきみこしと唱るとして思ひやとて他は古事  
記の書にりていふる和賀音富岐美とのこととて和期と書  
らら一つと相違りていふとす連声合の法を音伝不音

使むおれとておれまきみこしと使も昔の法にきき音は延べ  
又はつ法にりての自然の理に究りて定むとて大  
なされて古の法にりていふとすらよとて自然の理に  
りて定むとていふとすら相違の法にりて礪波氏  
の万葉にりて和期と書れよとて執りてとて文字と  
りていふとすら後申したる固まりとていふとすらとて必  
しとて唱るとてりて古事記にりてたて和期とて書  
れとていふとすらとていふとすら賀はとていふとすら  
法のやく文字にりていふとすら法にりて賀とすらと  
自然の理にりてとていふとすらとていふとすらとて  
とていふとすらとていふとすらとていふとすらとて

とて、こゝに申すは、こゝに、いふ方と合符の法と、いふ、こゝに、いふ  
と、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
私の法、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
と、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
又、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
あ、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
と、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
又、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
又、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
と、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
と、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
と、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、

天明七年正月

宣長

右第十六條

あ、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
れ、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
法、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
と、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
と、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、

宣  
は、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
了、駁、概、言、と、評、で、論、皆、は、の、れ、は、いふ、こゝに、申す、こゝに、いふ、こゝに、いふ、  
の、そ、者、の、つ、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、い、

くぐらうくく僅意あつたと思ふ人々程々の深<sup>シニツキ</sup>作らる習氣  
きつた物もあつたが、さういふものばかりのほかに、あつた  
皇國の古きい得が、さういふものが、あつた。

八月三日

三子おや

往々笑解に上田社底々作

鉗狂人上田秋成評同辨

〔秋〕狂人鉗で、さういふまで、且罪に依せざるべし。志づくと鐵索と  
破る他、心を待て再糾向せしむるの、今も、さういふ、思ひと、  
さういふ、二と、傳せむと、唯、さういふ、己、連索、さういふ、と、大人  
希く、哀憐、と、垂、神武記、載、さういふ、年、叙、と、不足、論、と  
さういふ、理、と、究、じ、べ、大、凡、天、地、内、の、本、意、皆、不、可、測、な、ら、ぬ、と、  
わ、ら、ん、心、偏、な、ら、ぬ、と、大、古、の、靈、奇、な、り、傳、説、終、つ、と、大、地、の、無  
究、な、り、大、理、と、意、得、べ、し、其、さ、う、い、ふ、さ、う、い、ふ、蹟、と、傳、つ、古、言、と、  
物、を、さ、う、い、ふ、大、神、さ、う、い、ふ、理、と、さ、う、い、ふ、行、と、<sup>イクハシラ</sup>、  
の、教、或、斬、為、三、段、等、な、ら、ぬ、と、大、八、洲、小、八、百、等、神、五、百、箇

磐石千頭百机<sup>ミドリツツ</sup>八千矛神八重垣八咫鳥子の類といふもて多  
額の類といふ手括<sup>シロフ</sup>ひて是をきいたりつるは本年歴の無量廣大なる  
と今日より人の一<sup>シロフ</sup>なるをききしをきつとて一<sup>シロフ</sup>いやはやとていひ  
今も是等の山中に傳<sup>シロフ</sup>屍朴野の民大古に方弗さうとや具  
人氏等に別の子孫を計らねた自れ長久なりけり財<sup>シロフ</sup>  
貯り利欲ぬ<sup>シロフ</sup>然い思慮<sup>シロフ</sup>し保<sup>シロフ</sup>つひに徳<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>疾<sup>シロフ</sup>患<sup>シロフ</sup>つべ  
ど設<sup>シロフ</sup>き<sup>シロフ</sup>し<sup>シロフ</sup>生<sup>シロフ</sup>以<sup>シロフ</sup>養<sup>シロフ</sup>あ<sup>シロフ</sup>天<sup>シロフ</sup>年<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>か<sup>シロフ</sup>流<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>生<sup>シロフ</sup>涯<sup>シロフ</sup>  
研織の業に依<sup>シロフ</sup>る<sup>シロフ</sup>是<sup>シロフ</sup>日<sup>シロフ</sup>時<sup>シロフ</sup>れ<sup>シロフ</sup>福<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>計<sup>シロフ</sup>思<sup>シロフ</sup>ご<sup>シロフ</sup>己<sup>シロフ</sup>の<sup>シロフ</sup>以<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>美<sup>シロフ</sup>  
つり<sup>シロフ</sup>勅<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>入<sup>シロフ</sup>大<sup>シロフ</sup>都<sup>シロフ</sup>迫<sup>シロフ</sup>田<sup>シロフ</sup>合<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>予<sup>シロフ</sup>が<sup>シロフ</sup>寓<sup>シロフ</sup>居<sup>シロフ</sup>せ<sup>シロフ</sup>  
加島<sup>シロフ</sup>より<sup>シロフ</sup>一<sup>シロフ</sup>老<sup>シロフ</sup>嫗<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>隣<sup>シロフ</sup>人<sup>シロフ</sup>ら<sup>シロフ</sup>れ<sup>シロフ</sup>が<sup>シロフ</sup>齡<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>百<sup>シロフ</sup>十<sup>シロフ</sup>  
心<sup>シロフ</sup>よ<sup>シロフ</sup>に<sup>シロフ</sup>又<sup>シロフ</sup>一<sup>シロフ</sup>人<sup>シロフ</sup>の<sup>シロフ</sup>百<sup>シロフ</sup>五<sup>シロフ</sup>歳<sup>シロフ</sup>より<sup>シロフ</sup>一<sup>シロフ</sup>が<sup>シロフ</sup>く<sup>シロフ</sup>

人<sup>シロフ</sup>は<sup>シロフ</sup>後<sup>シロフ</sup>の<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>己<sup>シロフ</sup>齡<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>同<sup>シロフ</sup>じ<sup>シロフ</sup>に<sup>シロフ</sup>ば<sup>シロフ</sup>ば<sup>シロフ</sup>然<sup>シロフ</sup>る<sup>シロフ</sup>の<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>より<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>  
仍<sup>シロフ</sup>て<sup>シロフ</sup>老<sup>シロフ</sup>嫗<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>ひ<sup>シロフ</sup>百<sup>シロフ</sup>歳<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>詔<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>ふ<sup>シロフ</sup>る<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>  
て<sup>シロフ</sup>程<sup>シロフ</sup>老<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>紡<sup>シロフ</sup>績<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>し<sup>シロフ</sup>往<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>計<sup>シロフ</sup>ら<sup>シロフ</sup>れ<sup>シロフ</sup>凡<sup>シロフ</sup>五<sup>シロフ</sup>十<sup>シロフ</sup>  
の<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>今<sup>シロフ</sup>や<sup>シロフ</sup>二<sup>シロフ</sup>十<sup>シロフ</sup>年<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>  
ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>大<sup>シロフ</sup>古<sup>シロフ</sup>に<sup>シロフ</sup>長<sup>シロフ</sup>生<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>ふ<sup>シロフ</sup>人<sup>シロフ</sup>の<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>  
て<sup>シロフ</sup>大<sup>シロフ</sup>古<sup>シロフ</sup>に<sup>シロフ</sup>二<sup>シロフ</sup>世<sup>シロフ</sup>二<sup>シロフ</sup>千<sup>シロフ</sup>年<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>  
ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>指<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>折<sup>シロフ</sup>て<sup>シロフ</sup>是<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>治<sup>シロフ</sup>す<sup>シロフ</sup>とい<sup>シロフ</sup>ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>  
ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>大<sup>シロフ</sup>古<sup>シロフ</sup>に<sup>シロフ</sup>載<sup>シロフ</sup>て<sup>シロフ</sup>思<sup>シロフ</sup>は<sup>シロフ</sup>大<sup>シロフ</sup>古<sup>シロフ</sup>に<sup>シロフ</sup>傳<sup>シロフ</sup>は<sup>シロフ</sup>る<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>  
ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>人<sup>シロフ</sup>の<sup>シロフ</sup>聞<sup>シロフ</sup>き<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>或<sup>シロフ</sup>は<sup>シロフ</sup>此<sup>シロフ</sup>を<sup>シロフ</sup>以<sup>シロフ</sup>て<sup>シロフ</sup>陶<sup>シロフ</sup>法<sup>シロフ</sup>  
と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>二<sup>シロフ</sup>記<sup>シロフ</sup>の<sup>シロフ</sup>傳<sup>シロフ</sup>は<sup>シロフ</sup>る<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>  
ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>是<sup>シロフ</sup>の<sup>シロフ</sup>体<sup>シロフ</sup>時<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>  
ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>も<sup>シロフ</sup>白<sup>シロフ</sup>附<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>ふ<sup>シロフ</sup>事<sup>シロフ</sup>あり<sup>シロフ</sup>と<sup>シロフ</sup>い<sup>シロフ</sup>



取らざらば非之んは侍候す思ふこと日國は御の月すして由  
時の中本とて思はれり物今に論じても加島里の姫  
との殿とて思ふべし百十の宮中とて思はれ百十五の宮中  
多しの程に思ふべし百十の宮中とて思はれ百十五の宮中  
わすれぬ物とて思ふべし百十の宮中とて思はれ百十五の宮中  
いふべし物とて思ふべし百十の宮中とて思はれ百十五の宮中

右身一條

秋日神の御本四河を玉に思ふこと日神の御侍候  
此子光華明彩照徹於六合之内とて又天岩屋戸而刺許母  
理坐也尔高天原昏暗。葦原中国悉闇因此而常夜柱<sup>注</sup>とて  
とて六合の天地四方の我を思ふこと日神の御侍候

て四海を思ふこと日神の御侍候  
て知事とは外に日國の事とて天地内の兵部は是の臨照  
とて思ふこと日神の御侍候  
づた三千年もたれ小理とて取り入りて昔形に  
置て一は画圖とて一物は事理とて一は侍候とて一は物  
とて思ふこと日神の御侍候  
いと物とて思ふこと日神の御侍候  
おしとて思ふこと日神の御侍候  
の画圖はとて思ふこと日神の御侍候  
字とて思ふこと日神の御侍候  
上右の透風を物とて思ふこと日神の御侍候



あまらきてその形の大小高低寸計り尺寸度り毫厘分釐  
暗光に照りて美醜のいかにぞかしゆくこといづろ事ごとくは  
こゝに展覧の望むはわづは人の性貪利をばし超るんた世界  
は内舟楫の舟は浪に往還して交易と事とをばし往還の便  
圖て地球之圖と云物と云んた文字にて事理の正しく  
とて條に國号と云んた物もあらずと云んた地形をたふさ  
こは國中にぞや吾皇國は行所なりと云んたことばも  
さひらた地の面はわづらひて一帯をなしてけしめたる小島  
ありては他と異なる人々ありては小島とて万邦より之  
きて用嗣とて大世界とて思はれしは日月とては現  
やとて云んて圓て万邦をく吾皇の恩とては現

加の首を奉て朝し皇と云んた一國と其言に服せぬの  
ことなき行とておとれど不審をいふこと太古の傳はて  
云ひよと云んた傳は吾皇と云んて何日月ハ吾皇の太古に  
復しと云んたことありて云んた誰か截断して事  
は果とて天竺には佛身の光りて國內と云んたこと後  
小室應吉祥の二菩薩よ令して日月とて云んたこと僅  
土六盤古氏の両眼日月とて云んたこと地皇氏の世定三辰分畫  
夜とて云んたこと文字の返り事とて種々の事と云んたこと  
とて他は吾皇ハ不可言と云んたこと大人はわづ太古の  
之奇と云んたこと信じて居んことを云んたこと  
唐とて他とて是と云んたこと取裁の眼あり

此書と典はいづれも一玉天地を他たに及ばざる様よ  
海峯の沈痾を以て取らざるは昔年吾師に傳授  
行きたるよ人も大古の古と謂ふもあらずに感く  
んと今誠く啞男啞女の配偶せしむるを人後を以てこれ  
小生の思はれた生とむるに及ぶや太古の人物も方弗とら  
んくも余と感て今日大人と傳上西土の思はれた生と  
一と三玉の本証を兼せしむる後の之は懐いて好むや可  
なり

**宣** 日神の活を本と謂ふも是れを傳授したるは物  
りば今も辨らざるも其れは從いて大日神天  
地内り系邦に悉く思へりては其の書

わきよりとていふも其れを書記に照徹六合をわきよと姑く傳  
ふのしる備してて其の設曲トキテとては日神とては活号  
といひてせん程もとも傳ふは然る名付たりて設曲人といふ  
書記一書に使用照臨天地ともわきよといふくは唐天皇系  
天地の皇系の天地ともわきよとて一書に日月既生次生蛭児  
とていふ日神月神ともわきよといふ程日月にわきよは後に  
わきよをわきよ日月ともわきよといふは程氏類多し神  
代記といふも但し唐天皇の日月を皇系は日月といふ別  
にわきよはわきよとて一玉の傳授のやむに暗しとハ  
神曲の趣にいふはわきよは一玉の皇系を降らるは  
大はえといふもわきよといふはわきよは程氏類多し又

古事記に草原中ふ悉暗とありたすうの六合と四海を  
國の表よりんと雖も然るにてかゝる草原にその主とあり  
として條にのづこ<sup>カキネ</sup>包括とす事には多しとて證すとて  
さしき事<sup>カキネ</sup>に富商ありて江戸の店とてしるべきは或時  
天下一日たりや<sup>カキネ</sup>風行はるるに江戸の店あるは代の方より  
東に人の許よりしひびきせり物より店地とや<sup>カキネ</sup>風一日たり  
は方と店中一人とては病臥とありて一人といひて  
店中一人とては病臥とありて一人といひて一人といひて  
又一人といひて<sup>カキネ</sup>や<sup>カキネ</sup>他<sup>カキネ</sup>に江戸に人々ありて江戸中  
し書きたる店中とありて江戸に江戸の店とてしるべきは  
ふんといひては江戸の店とてしるべきは

暗しとありては石戸ありては日なりとてありと  
一<sup>カキネ</sup>日ありては江戸の店とてしるべきは  
日なりとては江戸の店とてしるべきは  
くは物も但<sup>カキネ</sup>唐天空の日とありては其國を暗し  
何の用あり又阿含院の人物の諦と用をたしとて其國  
く<sup>カキネ</sup>國にありては江戸の店とてしるべきは  
と<sup>カキネ</sup>し<sup>カキネ</sup>は<sup>カキネ</sup>今<sup>カキネ</sup>時<sup>カキネ</sup>誰<sup>カキネ</sup>も<sup>カキネ</sup>さ<sup>カキネ</sup>る<sup>カキネ</sup>者<sup>カキネ</sup>ありては皇國のいと唐大  
ふ<sup>カキネ</sup>つ<sup>カキネ</sup>も<sup>カキネ</sup>た<sup>カキネ</sup>り<sup>カキネ</sup>と<sup>カキネ</sup>て<sup>カキネ</sup>ん<sup>カキネ</sup>凡<sup>カキネ</sup>て<sup>カキネ</sup>物<sup>カキネ</sup>の<sup>カキネ</sup>尊<sup>カキネ</sup>卑<sup>カキネ</sup>美<sup>カキネ</sup>惡<sup>カキネ</sup>の<sup>カキネ</sup>形<sup>カキネ</sup>の<sup>カキネ</sup>大<sup>カキネ</sup>小<sup>カキネ</sup>  
あ<sup>カキネ</sup>は<sup>カキネ</sup>り<sup>カキネ</sup>物<sup>カキネ</sup>ありては<sup>カキネ</sup>教<sup>カキネ</sup>導<sup>カキネ</sup>た<sup>カキネ</sup>大<sup>カキネ</sup>石<sup>カキネ</sup>と<sup>カキネ</sup>方<sup>カキネ</sup>寸<sup>カキネ</sup>の<sup>カキネ</sup>珠<sup>カキネ</sup>玉<sup>カキネ</sup>と<sup>カキネ</sup>て<sup>カキネ</sup>牛<sup>カキネ</sup>  
馬<sup>カキネ</sup>形<sup>カキネ</sup>大<sup>カキネ</sup>の<sup>カキネ</sup>人<sup>カキネ</sup>と<sup>カキネ</sup>て<sup>カキネ</sup>は<sup>カキネ</sup>い<sup>カキネ</sup>は<sup>カキネ</sup>る<sup>カキネ</sup>唐<sup>カキネ</sup>大<sup>カキネ</sup>の<sup>カキネ</sup>風<sup>カキネ</sup>と<sup>カキネ</sup>て<sup>カキネ</sup>下<sup>カキネ</sup>下<sup>カキネ</sup>ハ<sup>カキネ</sup>下<sup>カキネ</sup>  
ぬ<sup>カキネ</sup>ん<sup>カキネ</sup>狭<sup>カキネ</sup>小<sup>カキネ</sup>と<sup>カキネ</sup>上<sup>カキネ</sup>國<sup>カキネ</sup>に<sup>カキネ</sup>上<sup>カキネ</sup>電<sup>カキネ</sup>の<sup>カキネ</sup>馬<sup>カキネ</sup>毛<sup>カキネ</sup>國<sup>カキネ</sup>と<sup>カキネ</sup>て<sup>カキネ</sup>物<sup>カキネ</sup>と<sup>カキネ</sup>て<sup>カキネ</sup>南<sup>カキネ</sup>極

の下方にありて荒荒の玉あり草やもせざん人物よれ  
—且廣大なること大なる地球の三も此一事を定めて  
上田氏の事と四海の最上の國とてなすべし—神皇國ハ  
四海萬國の元本宗主たるものなり—幅員は四—も廣大なる  
ざること二柱大は神人<sup>カミ</sup>生後<sup>ナギノ</sup>の御子必<sup>カナラ</sup>とて皇—とて深理  
のありとるべし—を理はらるる人の小智を以てかく則て後<sup>ト</sup>  
に—とるふあはれなきも又傳り不則と託<sup>ツケ</sup>とて—とるべし不  
可測なりとい不可測といふて行<sup>ユク</sup>といふも不可測とて以て則<sup>ナ</sup>  
いといふも—小智とて—小智の辭<sup>ハ</sup>とて—不可測の理<sup>ハ</sup>  
も—とて現<sup>ア</sup>る目<sup>ハ</sup>とて—とて—皇國の事<sup>ハ</sup>も—とて—尊<sup>ウツク</sup>  
とて—とて—皇統の不易なる事<sup>ハ</sup>も—とて—申<sup>マウ</sup>さる

と修<sup>ス</sup>る一<sup>ハ</sup>人<sup>ハ</sup>も—とて—稲穀の美<sup>ウツク</sup>—とて—天<sup>アマ</sup>地<sup>チ</sup>  
縣隔<sup>ケ</sup>せりも外<sup>ソト</sup>とて—とて—又境域<sup>ケ</sup>も—とて—  
らば—とて神代<sup>カミヨ</sup>より—とて外<sup>ソト</sup>國<sup>クニ</sup>より祀<sup>マツル</sup>はるるものなり—  
元の世祖の威力<sup>イカリ</sup>も—皇國<sup>ミコク</sup>が—とて—  
玉の降<sup>ス</sup>るの—とて—つひに後<sup>ノチ</sup>春<sup>ハル</sup>せり—とて—  
わづらはし—とて—不可測の理<sup>ハ</sup>ありて存<sup>タラ</sup>とて—  
—とて—又—とて—の國<sup>クニ</sup>を—とて—  
—とて—皇國<sup>ミコク</sup>より—とて—  
—とて—小狭<sup>コサ</sup>なる田<sup>タ</sup>地<sup>チ</sup>を—とて—  
—とて—の—とて—土地<sup>チ</sup>も—とて—  
—とて—山澤<sup>ヤマノ</sup>曠<sup>カラ</sup>野<sup>ノ</sup>多<sup>ク</sup>—とて—皇國<sup>ミコク</sup>に—とて—田

地をしくしく人民甚稀少ん後をばきくはるる土比  
 の大小のくくくもと神もく付いたるをよとく大く戸口  
 稠密くして殷富隆盛くして字内を終て皇國なるを固め  
 一く此の事なるをく考へて又の不可測の理わくを  
 けく一く幾く世の人のくくくくくくくくくくくくくくくく  
 のかかやく結して尊ん子細くえくくく今上田氏とたて日  
 轍上虎とてこれとくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 いかく禍事とや太古の傳説各もようくくくくくくくくくく  
 供饗に正一のくく或はハ一と批アて何く或は妄も仍造一  
 て愚民と欺くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 一この道の西はくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

然るにこの皇國の古傳説は諸外外はなきは類子ありは眞身  
 を正傳として今日世界人間のありき一く神代の趣に符合一  
 て妙なりき一くくくくく然るを上田氏をく外史の雜傳として  
 小しむくくくこの妙趣はえりくくくくくハウの一語の思をいふ  
 暗くくくくは黒帝の時をくくくくくくくくくくくくくくく  
 いくく馬耳風をくくく物とて今一ウレをくくくくくくく  
 くるくくくくくく一京洛を門の小倉山を百校のく紙具を手に  
 けくくく一書二校づくくくくくくくくくくくくくくくくく  
 色紙とてわくく者十人のくくくくくくくくくくくくくくく  
 といづれも似たるまをくくくくくくくくくくくくくくくく  
 ぐ月けくく條は仍をくくくくくくくくくく上田氏をくくの端は皆也

と鷹をとりしめて十枚たぐう信ぜさばぬ一これ鷹物なり  
と云知くあざむきさばいかにしるやうなれど物とたそ  
中の一枚をみれば真物のあまのこひえとていふべし大づり  
小管一よ思ふべしいふにやもたぬさうらふよ物とて  
その真と見せしむるやとていふとてそとて鷹の欺るべし  
るやとていふにいふをみれば物とていふのやとていふ  
一枚の真物とて見せしむるやとて信ぜしむるやとていふ  
らうかといふ上田氏又いふにそとていふに必一枚の真物  
ありしとて十人のおまのくはるべきはとていふに及ぶは信ぜし  
正しれまよとていふにいとていふに我はたつとて真まする  
とていふにいとていふに真の定むとていふとて又も真仍

とていふとて定むとてあつとていふに物の精ひとていふに信まの  
を多しとていふ信くはひをて偶にた純一の古き目の眼と  
開きてそとていふに神代の吾古は後の妙趣ありて真まの物  
をたつとていふとて明白にいとていふに九枚の鷹物といふ  
とていふにいとていふとていふにいとていふにいとていふに  
とていふにいとていふとていふにいとていふにいとていふに  
は國の人の太古をたつとていふにいとていふにいとていふに  
とていふにいとていふとていふにいとていふにいとていふに  
とていふにいとていふとていふにいとていふにいとていふに  
いふにいとていふとていふにいとていふにいとていふに  
りていふにいとていふとていふにいとていふにいとていふに

ありて人なるは信ずるべしとて然るは其をばふの人のい  
ふこととてまゝに信ずれば事なれは信をうらむる  
所なくいふべしとていふべしとて直にいふべし

右系二條

秋 左社右社いづれも備へるべき定むる事なれば左社右社  
の事も左社をいふ一國の事右社をいふ一國の事なり  
がごとく左社右社をいふ一國の事なり  
一國の事右社をいふ一國の事なり  
皇とていふものより直にいふものより彼智術とて己を大  
ゆるす一偏土の事なり排滌とていふこと日本魂とてい  
偏とていふ一偏籍とていふこと一儒佛の二の事と土地にゆき

くばに培養とていふ生育とていふこと切之丹の事聖嚴の  
事なりとて二の事の神祕の事なりとていふこと即國土の相  
應とていふこと一とていふこと大徳とていふこと小智の推測と  
ていふこと今や二の事には羽翼を用ひしやとていふこと國津神  
の悪とていふこと今日日根とていふこと事功とてい  
ふこと後て運轉とていふこと決とていふこと止とていふこと  
撤吉の事いふこと復古の事學者の言とていふこと天代  
の事究たり間ふは自然の運轉とていふこと復たつ時とていふこと  
あつて約氏の一切と智術の事なれば往ひて今日  
弊風とていふこと一氏の勢力とていふこといふこととていふこと  
とていふこと往時とていふこと往時とていふこと今世とていふこと





中於義入事たふぐ神を信んるをてそのはたして  
たはだふたあききし人カをたあしく止まらぬべし  
たよあききしは皆必止しあふに陸軍中をたふさ着無  
邪正真偽とくくたはて感にぶとくぞ學向しなとら

右三條

秋 清濁は平古言に精嚴なりは混清しとて後世の俗解  
とて大氏代えて宜し近自をよ端あはたはすは畧  
按とくは精嚴なりは文字を清のよとては混清を清と  
とら人化をたは清と混合とらとていふは精嚴の  
清や濁や必上りの連なりて清は必清濁は必濁との  
よあはたはたがの

宣 清濁入り精嚴なりは文字を清と濁とを清と濁と  
しきひごころとて口清の精嚴なり。かよは清濁字  
と用とて精嚴を定めてとて口清の清濁の精嚴  
とていふは今も俗語よとて祖父母は濁  
とていふは父母は清とていふはたあはた  
清濁誰れは字入りははてとてとて濁の清濁  
乳の思ふとて混ぶるは清濁の清濁の  
あはたはたは清濁とて上古を清濁とては清  
濁や上りの連なりとて清濁の清濁の清濁の  
清濁の清濁の清濁の清濁の清濁の清濁の清濁の  
清濁の清濁の清濁の清濁の清濁の清濁の清濁の

どんどんに混淆するもの

右方四條

秋とて記す所の代りて事ひてたよのよよ  
の古人の格言はどては野放しにるい今流りて  
果ふ人のかくして産後依れどきんわは且格調  
そやの風神のあは依れども日本記竟宴のあて  
仁徳天皇の遺ひをた探むるどてと論をまわ  
又是のたけけも新づき音あり素直に八雲と豊玉  
作ら赤玉の姿を自そののまわつる神武天皇の  
の筆ひき小佐田須賀余理作の依井川又武大山を  
依依の流のま集集申すわてとて格調とて

ていへ飛多信源原流世のしらどての風流をくぐや  
と昨より大息須更りて怒りてとら本昔日と激論也  
く決ておはれわどとて決え終りかひのわわわ一人毎に  
おもてくはれれり大人々々不可測と論を論  
くはて一教を以て時代格調の神定も争ひてとてわわ  
くや太古を以て同のわわとての本も我社友にわわ  
しててとて

五記を載せし上古のころなり中い後流の調りかきわ  
とていへは是れをいふにわわ上田氏の作ら  
人藤原のてはわわとて物とて今思ひに篇のいへ  
いへてわわとて大方をわわ古きわの古歌はわわ

耳が又<sup>は</sup>び<sup>び</sup>の解<sup>が</sup>び<sup>び</sup>耳をまた<sup>だ</sup>た<sup>と</sup>耳が  
く<sup>く</sup>ヤ<sup>ヤ</sup>く<sup>く</sup>た<sup>た</sup>び<sup>び</sup>を<sup>を</sup>に<sup>に</sup>後<sup>後</sup>と<sup>と</sup>定<sup>定</sup>じ<sup>じ</sup>う<sup>う</sup>も<sup>も</sup>ひ<sup>ひ</sup>ご<sup>ご</sup>ん<sup>ん</sup>凡<sup>凡</sup>  
て<sup>て</sup>河<sup>河</sup>も<sup>も</sup>つ<sup>つ</sup>ま<sup>ま</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>の<sup>の</sup>古<sup>古</sup>と<sup>と</sup>後<sup>後</sup>と<sup>と</sup>大<sup>大</sup>に<sup>に</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>又<sup>又</sup>い<sup>い</sup>ま<sup>ま</sup>  
く<sup>く</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>た<sup>た</sup>る<sup>る</sup>月<sup>月</sup>より<sup>より</sup>な<sup>な</sup>ど<sup>ど</sup>も<sup>も</sup>河<sup>河</sup>に<sup>に</sup>神<sup>神</sup>代<sup>代</sup>  
中<sup>中</sup>古<sup>古</sup>と<sup>と</sup>今<sup>今</sup>れ<sup>れ</sup>俗<sup>俗</sup>語<sup>語</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>同<sup>同</sup>じ<sup>じ</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>な<sup>な</sup>ら<sup>ら</sup>ず<sup>ず</sup>に<sup>に</sup>て<sup>て</sup>  
あ<sup>あ</sup>の<sup>の</sup>河<sup>河</sup>と<sup>と</sup>准<sup>准</sup>じて<sup>て</sup>思<sup>思</sup>ふ<sup>ふ</sup>に<sup>に</sup>こ<sup>こ</sup>れ<sup>れ</sup>が<sup>が</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>耳<sup>耳</sup>ど<sup>ど</sup>が<sup>が</sup>  
河<sup>河</sup>が<sup>が</sup>く<sup>く</sup>一<sup>一</sup>首<sup>首</sup>の<sup>の</sup>河<sup>河</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>た<sup>た</sup>び<sup>び</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>花<sup>花</sup>さ<sup>さ</sup>  
月<sup>月</sup>甲<sup>甲</sup>の<sup>の</sup>類<sup>類</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>後<sup>後</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>  
後<sup>後</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>古<sup>古</sup>河<sup>河</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>古<sup>古</sup>河<sup>河</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>  
系<sup>系</sup>集<sup>集</sup>れ<sup>れ</sup>内<sup>内</sup>同<sup>同</sup>じ<sup>じ</sup>時<sup>時</sup>代<sup>代</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>河<sup>河</sup>が<sup>が</sup>く<sup>く</sup>ひ<sup>ひ</sup>ま<sup>ま</sup>い<sup>い</sup>く<sup>く</sup>耳<sup>耳</sup>ど<sup>ど</sup>  
を<sup>を</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>又<sup>又</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>後<sup>後</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>

ま<sup>ま</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>准<sup>准</sup>じて<sup>て</sup>一<sup>一</sup>時<sup>時</sup>代<sup>代</sup>の<sup>の</sup>風<sup>風</sup>潮<sup>潮</sup>  
河<sup>河</sup>の<sup>の</sup>耳<sup>耳</sup>ど<sup>ど</sup>が<sup>が</sup>く<sup>く</sup>一<sup>一</sup>首<sup>首</sup>の<sup>の</sup>河<sup>河</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>た<sup>た</sup>び<sup>び</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>花<sup>花</sup>さ<sup>さ</sup>  
く<sup>く</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>後<sup>後</sup>と<sup>と</sup>か<sup>か</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>  
また<sup>また</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>准<sup>准</sup>じて<sup>て</sup>一<sup>一</sup>時<sup>時</sup>代<sup>代</sup>の<sup>の</sup>風<sup>風</sup>潮<sup>潮</sup>  
今<sup>今</sup>上<sup>上</sup>田<sup>田</sup>氏<sup>氏</sup>信<sup>信</sup>清<sup>清</sup>皇<sup>皇</sup>后<sup>后</sup>宮<sup>宮</sup>の<sup>の</sup>う<sup>う</sup>れ<sup>れ</sup>姿<sup>姿</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>  
清<sup>清</sup>く<sup>く</sup>ふる<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>  
見<sup>見</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>  
海<sup>海</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>  
天<sup>天</sup>地<sup>地</sup>の<sup>の</sup>理<sup>理</sup>を<sup>を</sup>し<sup>し</sup>る<sup>る</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>あり<sup>あり</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>上<sup>上</sup>古<sup>古</sup>の<sup>の</sup>あ<sup>あ</sup>り<sup>り</sup>と<sup>と</sup>い<sup>い</sup>ふ<sup>ふ</sup>も<sup>も</sup>  
そ<sup>そ</sup>が<sup>が</sup>く<sup>く</sup>一<sup>一</sup>首<sup>首</sup>の<sup>の</sup>河<sup>河</sup>は<sup>は</sup>さ<sup>さ</sup>か<sup>か</sup>り<sup>り</sup>や<sup>や</sup>も<sup>も</sup>く<sup>く</sup>た<sup>た</sup>び<sup>び</sup>さ<sup>さ</sup>ら<sup>ら</sup>に<sup>に</sup>は<sup>は</sup>花<sup>花</sup>さ<sup>さ</sup>

可測... 汝言... 思...

右身五條

秋 天皇<sup>世</sup> 倭國三韓... 汝言... 思... 眼... 耳... 鼻... 舌... 身...

早... 汝言... 思... 眼... 耳... 鼻... 舌... 身... 創業者... 神...







非なる事多しと告てこれより凍をば忠んて  
なんかひつたはよまあつらひいひたれそまをえんよ  
わが行状を非を見せかして余が感涙はくぞむと  
しつ物と且この事をもみくほむなるがよ余と彼と  
思ひて丁ねもち皇國はいひをばとましくしていひだ  
るの程人のこといひたりははいひのわらふこといひ  
上件上田氏痛いそく道を害はつ物なれば  
いさくこといひ辨はるるなり又い人わらふこといひ  
ひまひのひと

清久の道はまらばて難儀人

あつた物といふえづらや 宣長  
上田社をばたはのん

寛政二年唐成六月書寫畢 稻掛大平

是と信じて文化の八年  
九月四日 泰足



95563

*[Faint handwritten text, possibly bleed-through]*

*[Faint handwritten text, possibly bleed-through]*

*[Faint handwritten text, possibly bleed-through]*

*[Faint handwritten text, possibly bleed-through]*

*[Faint handwritten text, possibly bleed-through]*

